

2026_0505「真っ赤な浅間山」日々の理科 4286号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

4月下旬の北軽井沢では、麓の木々も芽吹き始め、浅間山の山肌からも冬の雪はほぼ消えています。長い冬を越え、黒褐色の火山体が春の姿を現した浅間山は、どこか軽やかで、季節の移ろいを素直に感じさせる山です。ところが、ときに春は思いがけない表情を見せます。5月に入り、通過した前線が山頂付近に雪をもたらし、朝になると頂上部だけが再び白く雪化粧していました。

その一瞬の雪が、黎明の低い太陽光を受けて、驚くほど鮮やかな紅色に染まりました。まだ太陽高度の低い早朝、長い波長の赤い光だけが強く届き、白い雪面がまるで巨大な反射板のようにその色を映し出したのです。普段の黒い火山岩や雪のない斜面では、ここまで鮮烈な赤にはなりません。白い雪があるからこそ、朝焼けの光は純粋な赤として山頂を包み込み、「真っ赤な浅間山」という特別な光景が生まれます。

春山として落ち着きを見せ始めたはずの浅間山が、まるで真冬の名残と春の光を同時にまとったようなこの朝の姿は、山の気象がいかに変わりやすいかを物語っています。春本番の麓から見上げると、その赤さはいつそう際立ち、浅間山が季節の境目にだけ見せる、ほんの短い奇跡のようにも感じられました。雪が消えた季節だからこそ、かえって印象深い、春の浅間の珍しい一瞬です。

(2026年5月上旬／北軽井沢)

